

近世下鴨社における年中行事

宇佐美 尚穂

はじめに

現在、研究会において読み進めている『下鴨社家日記』^①は、近世において下鴨社の氏人であった田中家に伝来したものである。同家は神殿守を家職とする氏人の家である。同日記には、神殿守として下鴨社の祭祀に際して神供を調進することや、氏人として下鴨社の祭祀に出仕している為、下鴨社の年中行事に関する記事も多く見られる。従って、下鴨社における近世の年中行事について知る必要がある。しかし、近世下鴨社の年中行事の研究は未だなされていない^②。

下鴨社の年中行事には、文明期以降、永い中断の時期がある。「鴨社年中行事」^③によると、中断理由としては、諸国の莊園・御厨所等の退転と文明の乱による本殿を始めとする建物の焼失が挙げられる。これらは、年中行事の執行に大きな影響を及ぼし、年中行事はおろか日供御料などまで中断せざるをえなくなったとされる。中断した年中行事の再興で知られるものに、賀茂祭と御蔭祭がある。賀茂祭が文亀二年に、御蔭祭が永正一四年に中断され、中断からそれぞれ一九二年・一八六年後の元禄七年に再興されている。しかし、この永い中断の間は、両祭に限ったことでなく、殆どの年中行事に言えることであっ

た。その中には、再興出来ずに略儀となってしまったものや、ついには退転に至ったものも少なくない。

永い中断の期間を経ての近世下鴨社の年中行事については、現在解らないことが多い。その為、まずは年中行事の変遷を踏まえる必要がある。このことは『下鴨社家日記』を読み進める上でも意義のあることと言えよう。

本稿では、近世下鴨社の年中行事研究の第一歩として、元禄期の再興に焦点をあてて、近世を通して何時どのような年中行事が再興されたか整理し、その変遷を追うことを試みる。その為に、近世下鴨社の年中行事を記した『年中行事帳』^④を探し整理することも行った。また、元禄期以前の年中行事の施行状況を知る為に、延宝期のそれを確認した。本稿では、『年中行事帳』と『社家日記』を基本史料とする。「社家日記」は、『下鴨社家日記』と下鴨社の社家である鴨脚家に伝来した「鴨脚家文書」「鴨脚正彦家文書」「総合資料館所蔵鴨脚家文書」を使用した。

1 再興以前の状況

(1) 延宝期の年中行事

『下鴨社家日記』で確認できる最も古い日記は、延宝六年の「田中伊連日記」である。次いで、延宝七年の「鴨社延宝造営日記」「鴨社延宝造営遷宮記」と続く。幸いなことに、「鴨脚正彦家文書」の中に、「春光日次(延宝六年)」「春光日次(延宝七年)」と同年のものが存在する。これらから、延宝期の下鴨社の年中行事の施行状況を見てみよう。それに当たって、延宝七年は、寛永六年以来、五〇年ぶりに造営遷宮が行なわれた年であるので記述もそれに関することが多くなっている。従って、延宝六年を中心に見ることにする。

下鴨社の年中行事は、文明期以降、永い中断の時期を迎える。中断理由として挙げられるのは、諸国の莊園・御厨所等の退転と文明の乱による本殿を始めとする建物の焼失である。「鴨社年中行事」にも、

建津乃身命者

神武天皇東征之御時、於軍中祭賜 天皇之御母、而奉預神璽故謂宅神、至 綏靖天皇御宇、住葛野川与賀茂川流会所河合地、而以領地之 建身田今竹田 年税為神饌、及 垂仁天皇御宇有造営御祖神宮

神籬、爾來被寄諸国之庄園足神税、因年中神事嚴重也、寛仁之官符者神領四郷而惣高九万九千斛云、又二季之祭御神樂更衣其外諸神祭咸以料所勤行之処、依応仁兵火殿舎悉成灰燼、神領亦減省、自有及諸神事中絶、從秀吉公御檢地僅賜神領五百四拾老斛之御印、而勤仕畢

と記されている。近世以前に下鴨社が所有していた所領は、「御祖宮

年中行事」^⑥によると莊園二四国五一ヶ所・御厨所九国一三ヶ所であったとされる。それにより、年中行事は施行されていたのであるが、戦国期の莊園退転によって莊園からの収入が減少し、それまで嚴重に勤めてきた年中諸行事はおろか日供等まで中断せざるをえなくなった。また、文明の乱の兵火によって殿舎がごとく焼失してしまったことは、年中行事退転の大きな要因である。文明二年六月一四日に下鴨社の東西両本殿はもとより、賀茂齋院御所・鴨社神館御所等、主要な建物の殆どが焼失^⑦。天文五年七月二三日には、社領の総社及び福宜・氏人の里亭、村落までもが焼亡することによって壊滅的な被害を受けている。その後、太閤検地により神領五四一石の御朱印を得たことで、細々と神事を勤ることが出来るようになる。この下鴨社の社領であるが、近世を通して五四一石^⑧となっている。

では、延宝期の年中行事の施行状況はどういうものであったのか見てみよう。延宝六年に行なわれていることが確認及び推測できる年中行事は次のものである。毎月一日に行なわれる月次之神事(月次奉幣)。正月一日の日供御料・二日の卯杖神事・三日の日供御料・七日の御節供神事・一五日の御戸開神事・四月午日の御蔭山神事・西日の葵祭(賀茂祭)・五月四日の御菰蒲神事・五日の御節供神事・九月九日の御節供神事・十一月晦日の氏神之神事^⑨。このなかで、中断以前と変わらない形で行なわれている年中行事は、月次之神事(月次奉幣)・日供御料・卯杖神事・御菰蒲神事・氏神之神事である。これ以外のものは、「神供備ル」とのみ記述されていることから、略儀で行なわれていたことが解る。

文龜二年・永正一四年にそれぞれ中断された賀茂祭・御蔭祭である

が、その施行状況については延宝七年の記事が詳しいので見てみよう。

「鴨社延宝造営日記」(『下鴨社家日記』)に次のように記されている。

四月十八日 午ノ日御祭、^(本意)位官ニ而御神供備、但普請留り候

廿一日 酉ノ日葵御祭、位官ニ而御神供備、同普請留り候

また、「春光日次」(「鴨脚正彦家文書」)には、次のように記されている。

四月十八日 当社祭、春光社参仕ル、神供備ル、大考膳拝領仕ル、

貴布祢ヲ葵桂持参、祝儀ニ米三升遣ス

廿一日 葵祭、春光・光富葵桂ヲ掛社参、神供備ル、大考膳

拝領仕ル、普請止申、当番昼夜番代頼申候

氏人である田中家が衣冠を付けて神供を備進し、社司がそれを神前に備えている。つまり、中断中も社司や氏人の手によって神供備進のみの略儀で祭祀を執り行っていたことが解る。ここでいう「普請」とは、同年に行なわれた造営遷宮の普請のことである。両祭の当日は、普請を中断して祭祀を行っている。

これらのことから次のようなことが言える。下鴨社は、荘園の退転や文明の乱による社殿の焼失によって年中行事の中断を余儀なくされた。太閤検地で定められた五四一石の朱印地でも、年中行事を賄いきれぬものではなかった。年中行事の再興は迅速に進むものではなかった。その状況は、延宝六年においても変わっていない。この時期下鴨社では、月次之神事(月次奉幣、毎月一日)・日供御料(一月一日・三日)・卯杖神事・御菖蒲神事・氏神之神事は中断以前と変わらない祭祀で行なわれている。また、御節供神事(一月七日・五月五日・九月九日)・御戸開神事(一月一五日)・御蔭山神事・賀茂祭は、神供を備

るのみであったことが解る。これらの当時施行されていた数少ない年中行事は、下鴨社にとってなんらかの意味を持つものであったと考えられる。そのことは、下鴨社において重要な年中行事である賀茂祭・御蔭祭が、中断中においても社司や氏人の手によって略儀ではあるが祭祀が行われていたということからも推測することが出来る。

(2) ♪年中行事帳の伝来

下鴨社の年中行事を知ることが出来るものに、♪年中行事帳がある。中断した年中行事を再興するためには、古儀の伝承が必要であった。その古儀の伝承には、♪年中行事帳の存在が重要であったと考ええる。従って、近世までにどのような♪年中行事帳が下鴨社に伝承されていたかを踏まえる必要がある。現在、近世より前に記された♪年中行事帳としては、一四世紀末から一五世紀にかけて祝鴨脚光敦によって作成された「年中行事」と、応保年間の禰宜祐直によって作成された「祐直卿記」が確認できるのみである。しかし、「祐直卿記」の信憑性を問う声があること、他の♪年中行事帳の所在確認など課題は多い。従って、本稿では、「社家日記」の♪年中行事帳に関する記載から、近世に伝承された♪年中行事帳について見ていくことにする。元禄七年が♪年中行事帳が近世に新たに作成された最初であるので、それ以前の♪年中行事帳の伝承状況を「社家日記」から見てみよう。

「社家日記」に♪年中行事帳の記述が見られるのは、年中行事再興に際する記事である。まず、元禄五年の夏越祓神事の再興に際してである。この再興は、元禄七年の賀茂祭・御蔭祭の再興に先立つもの

として興味深いものである。夏越祓神事とは、六月晦日に御手洗川の辺で夏越の大祓が行なわれる年中行事である^⑧。この再興に際して氏人が賀茂伝奏中御門大納言資熙に御手洗川での夏越祓で禰宜・祝と共に着座することを願ひ出るが、先例が無い事を理由に認められなかった。これを不服とした氏人が「諸事着座仕候准勘之例」を別紙に書上げ賀茂伝奏に提出し、再度願ひ出る。これを請けて社司は、氏人の記した「諸事着座仕候准勘之例」を一つ一つ否定した「古来氏人次座之例曾以無御座例」を書上げ提出する。結果として、氏人の着座は認められなかった^⑨。

この賀茂伝奏中御門に提出された氏人側の「諸事着座仕候准勘之例」と社司側の「古来氏人次座之例曾以無御座例」は何を典拠にしているのだろうか。まず氏人側は、「只今ハ中絶仕候へ共年中行事ニ相見申候」と見え、「年中行事」を所持していることが解る。次に社司側は、「右年中行事ニ相見へ申候」「右応保年中祐直記ニ六月晦日六月祓十二月晦日大祓ト相見へ申候」「旧記ニ相見へ申候則旧記書抜別紙差上申候」「旧記別紙書抜差上申候」と見え、「年中行事・祐直記・旧記」を所持していることが解る。「年中行事」を社司側・氏人側の双方が所持していることが解るが、それが同じ内容かどうかは定かではない。しかし、双方の「年中行事」と社司方の「祐直記」においては、共に簡単な記述である。一方、社司方の所持している「旧記」は「書抜別紙差上申候」程の詳しい内容であることが解る。

「祐直記」とは、先程も述べたように禰宜祐直によって書かれた応保年中の「年中行事帳」であるが、現在その信憑性について取り沙汰されているものである。この「祐直記」については、元禄五年六月

二五日の記事に^⑩「応保年中、祐直記ニ六月晦日・一二月晦日大祓在之由、河合禰宜祐之申之、難信用也、後人伝達之士勘正之當時禰宜家輩旧記不所持故、諸神事不勘之事旨也」とある。この記事から、「祐直記」が河合社禰宜祐之に確かに伝承されていたが、元禄五年の時点で既にその信憑性が問われていたことになる。

では、年中行事を詳しく記述した「旧記」を誰が所蔵していたのであろうか。賀茂祭が再興された年である元禄七年二月二十九日の記事に次のように記されている^⑪。

一伝奏清閑寺中納言殿、禰宜久祐・祝代官秀久・長延呼参候故参候処ニ、今度之葵祭之義ニ付、其元之旧記ニ在之候ハ、関白様察々ニ御説被成度由被仰候間、河茂へ談合候而持参可有之候旨被仰付也

つまり、関白近衛基熙が、伝奏清閑寺中納言熙定を通じて、河合社祝鴨脚秀久に所持している「旧記」の閲覧を所望しているのである。禰宜・祝双方を呼んだ上で、祝だけに「旧記」の提出を求めているのである。このことから、祝家にのみ年中行事の次第が詳しく記された「旧記」が伝承されていたことが推察出来る。

このような「年中行事帳」の伝来形態には、下鴨社の祭祀組織の在り方が関係している。鴨社の祭祀組織の特徴として、宮司がいないことが挙げられる。社司である禰宜と祝・氏人・下役人などで構成され、いずれも世襲と年老をもって継承された。その為、たびたび禰宜と祝の間で「上座争論」^⑫が起きている。伝来形態の理由として、禰宜家と祝家の対立があると推察出来る。それによって、禰宜家と祝家にそれぞれ別の「年中行事帳」が伝来したのであろう。

以上、「杜家日記」からの考察ではあるが、次のようなことが言える。元禄五年の時点では、祝家にのみ詳しい年中行事次第を記した「旧記」と呼ばれる、年中行事帳が伝来していたことが解る。これは、禰宜家に「旧記」が伝来していなかったと断定するものではない。しかし、詳しい、年中行事帳が祝家のみに伝来されていたということは、祝の年中行事に対する役割の大きさが窺える。その意味で、年中行事の再興にあたって祝家は重要な役割を担っていたと言える。年中行事の再興にあたって、古儀の再興という観点から祝家の所持する、年中行事帳が必要であったのである。

2 年中行事の再興

(1) 年中行事帳からみた再興状況

下鴨社の年中行事は、文明期以降、永い中断の時期を迎える。その中には、再興出来ずに簡単な祭祀となってしまうものや、ついには退転に至ったものも少なくない。ここでは、近世に作成された、年中行事帳を整理すると共に、その、年中行事帳から中断した年中行事の再興状況を見てみよう。尚、年中行事の名称・施行日・数に関しては、細かな検討が必要であるので、本稿では、名称・施行日・数については、近世になって新たに作成された最初のものである「賀茂御祖皇太神宮年中神事」の記述に従うことにする。

まず、近世に作成された、年中行事帳を整理して見よう。近世に作成された下鴨社の、年中行事帳で現在確認できたものは以下の通りである。ここで取扱ったものは、作成年代あるいは筆者の判るもののみとした。^③

①「賀茂御祖皇太神宮年中神事」(「鴨脚家文書」京都府立資料館蔵)^④
元禄七年二月に、賀茂祭再興の口上書に添えて、鴨社から京都町奉行小出淡路守守里へ提出したものの写しである。内容は、下鴨年中神事目録・鴨御祖皇太神宮御寄附庄園并御厨所の順で記されている。まず下鴨年中神事目録には、正月から二月までの年中行事を列記し、その年中行事に関する簡略な説明と、その当時の施行状況を記している。次に、鴨御祖皇太神宮御寄附庄園并御厨所には、庄園・御厨所・豊浦庄内海のそれぞれの目録が記されている。

②「賀茂御祖社祭祀記」(内閣文庫所蔵)^⑤

禰宜梨木祐之によって書かれたものの後世の写本である。作成年代は不明であるが、年中行事の再興状況から元禄十一年以降・祐之の没年から享保八年以前の作成であると推察できる。内容は、年中行事の詳しい次第が記され、それらの当時の施行状況を記している。

③「鴨社年中行事」(『日本祭礼行事集成』巻一所収)^⑥

安永七年六月に正禰宜泉亭俊春によって作成されたものの後世の写本である。年中行事の次第が詳細に記されている。当時施行されていた年中行事のみの記述である。

④「御祖宮年中行事」(京都大学文学部附属図書館所蔵)^⑦

寛政七年に、権祝鴨脚秀豊によって作成されたものである。まず、当時施行されていた年中行事の次第を詳細に記し、神殿・社職の次第を記す。その後、当時中絶之祭事・上古之神戸諸国庄園並御厨所・當時退伝之末社並殿舎橋が記されている。

⑤「神事執要略次第」(「鴨脚家文書」京都府立総合資料館蔵)^⑧

作成年は明らかではないが、④と同じく権祝鴨脚秀豊によって記され

たものである。秀豊の没年は天保八年であるので、それ以前のもの。年中行事の次第が詳細に記されている。当時施行された年中行事のみの記述である。

⑥「年中神事目録」〔「官幣十二社官祭私祭取調書」京都府立総合資料館所蔵〕

明治二年七月に鴨社から神祇省へ提出したものである。内容は、①を基にして、それに修正を加えたものである。

管見の限り、以上六種の『年中行事帳』が確認できるが、目的別に区分すると、記された時代にどのような年中行事が行われていたかを書出し他者に報告することを目的としたものは①⑥、年中行事を悉無く執行することを目的としたものは③⑤、年中行事の中断を把握した上で詳しい年中行事施行次第を記すことを目的としたものは②④である。特に前者は、鴨社が京都町奉行や神祇省に施行年中行事を報告するために作成されたものである。また、後者の二つは、目的を別にしながらも禰宜家に伝来したもの(②③)と祝家に伝来したもの(④⑤)の二系統が存在することが判る。先程も述べたように、近世を通じて禰宜家と祝家では幾度も「上座争論」が起っているが、その度に上下の別はないとされている。後者二つの伝来形態の理由として禰宜家と祝家の対立があると推察できる。しかし、②と④の年中行事帳を比較すると、年中行事の記述に同じ典拠を使用していると推察できるものがある。また、④に記された当時退伝之末社並殿舎橋の記述は禰宜家の「祐直卿記」を典拠としている。これらのことから、近世においては禰宜家と祝家の『年中行事帳』の交流があったことが解る。

次に、『年中行事帳』からみた年中行事の再興状況を見てみよう。

下鴨社の年中行事として近世に把握されていたものは、「賀茂御祖皇太神宮年中神事」によると七五回を数える。整理した『年中行事帳』の内、記された時期が判り、無退転・形ばかり施行・退転の別のあるものは、次の三冊である。元禄七年作成の「賀茂御祖皇太神宮年中神事」・寛政七年作成の「御祖宮年中行事」・明治二年作成の「年中神事目録」。この三冊から近世下鴨社の年中行事の再興状況を概観して見よう。また、その三冊の『年中行事帳』から、下鴨社の近世年中行事施行状況を示したのが表一(次頁)である。

元禄七年の年中行事施行状況は、無退転二八・形ばかり施行七・退転四〇となっている。無退転とされる年中行事のうち、四つが「近年再興」とある。次に、寛政七年には元禄七年から一〇の年中行事が再興・四つが形ばかり再興している。従って、年中行事施行状況は無退転三八・形儀七・退伝三〇となっている。次に明治二年には、寛政七年から四つの年中行事が再興し、七つが形ばかり再興、一つが退転している。従って、無退転四二・形ばかり施行一三・退転二〇となっている。再興・形ばかり再興の殆どが「近年再興」と記されている。また、退転の年中行事は臨時祭であり、文化十一年に再興して明治元年に廃止されたものである。従って、近世末の年中行事施行状況としては、無退転四三・形ばかり施行一三・退転一九といえる。

元禄七年から近世末までに再興した年中行事は、元禄七年の「近年再興」と記されている年中行事を含めると、一八が再興し・一〇が形ばかり再興していることが解る。どのような年中行事が再興されたか見てみると、寛政七年以前に再興されたものは、屠蘇白散神事・罷神事・武射神事・御戸開神事・土毛(解)・鎮祭(四月・十一月)・御蔭

近世下鴨社における年中行事

表1 下鴨社の近世年中行事施行状況

月	一	二	三	四
日	元	一	二	三
①元禄七年	○日供御料并若水神事 ○屠蘇白散神事 ○月次奉幣	○月次奉幣 ○旬之神事 ×土毛神事 ×御戸開神事	○月次奉幣 ○旬之神事 △御節供神事 ×後宴	○月次奉幣 ○旬之神事 △御節供神事 ×後宴
②寛政七年	○	○	○	○
③明治二年	○	○	○	○
備考(元禄年間以降の再興)	①に近年再興とある(元禄五年に再興) 註1	③に近年再興とある	元禄一一年に形ばかり再興	③に近年形ばかり再興とある

[illegible]

[illegible]

*①は「賀茂御祖皇太神宮年中神事」②は「御祖宮年中行事」③は「年中神事目録」である。
 *備考は、①③と、「鴨脚家文書」「鴨脚正彦家文書」から確認できたものである。
 *○は「無退伝にて施行」、△は「形ばかり施行」、×は「退伝つかまつり候」と記されているものである。
 *名称・施行日・数については、①の記述に従った。
 註1 この神事については、「賀茂御祖社祭祀事記」（元禄一二年・享保八年）に「若水儀、其儀今也絶候」とあり、検討を要するものである。
 註2 貞享四年に形ばかり再興、明和年中より社家によつて経営、文化一一年に再興、明治元年に廃止となる。

窓 山神事・葵祭（賀茂祭）・御戸代神事・名越祓神事・御節供神事・小

史 早稲神事・冬季神服神事・御神之神事である。一方、寛政七年以降

は、御神楽・臨時祭・河合社神事・旬之神事（二・四・五・六・七・九・一〇・一一・一二）となっている。明治二年に「近年再興」と記されている旬之神事とは「社司氏人出仕候て神供備進申候事ニ御座候」と、日供御料と類を同じくするものである。また、元禄七年までに行なわれていた年中行事は、月次奉幣・日供御料またはそれに類するものが多い。

以上のことから、次のようなことが確認できた。近世の年中行事施行状況は、元禄七年には中断期以前と同様に施行している年中行事が二八、簡略化され神供備進という形で施行されている年中行事が七、退転してしまった年中行事が四〇となっている。半数以上の年中行事が退転してしまっていることが解る。それ以後、近世末までに一八の年中行事が再興し、一〇の年中行事が形ばかり再興された。近世末の年中行事施行状況は、無退転で施行四三・形ばかり施行一三・退転一九であった。この年中行事の再興は、近世を通じて行なわれているが、数・内容ともに、寛政七年以前の再興状況が著しいことが解る。

また、近世において退転してしまった年中行事が一つも見られないということは興味深い。また、〆年中行事帳であるが、再興以前には、禰宜家と祝家で個々に伝来し、尚且つ詳しい〆年中行事帳は祝家のみに伝来していた。しかし、元禄七年以降に作成された近世の〆年中行事帳に、詳しい記述のある禰宜家のものが見られること、祝家と禰宜家の交流が見られることは、中断した年中行事の再興が契機となつてゐることを指摘しておきたい。

（2）年中行事再興の契機

延宝期から元禄期にかけては、次々と朝儀や勅祭が再興された時期であった。延宝六年に、応仁の乱後に中断していた石清水放生会が、幕府より一〇〇石の下行米をもって再興される。貞享四年には大嘗祭が、後土御門天皇の文正元年に行われて以来、九代二〇余年ぶりに再興されている。そして、元禄七年には、賀茂祭が一九二年ぶりに再興されている。このように、朝儀や勅祭が次々と再興された背景には、朝廷における靈元上皇や廷臣たちの熱意と、幕府における家綱・綱吉の文治政策とにあわせて、神社の側より朝廷と幕府とに行なわれた働きかけが有効に作用したことによると言われている。

下鴨社の年中行事の再興状況を整理すると共に、下鴨社の年中行事再興の働き掛けを見てみよう。

前節で、寛政七年以前の年中行事の再興状況が著しいことを示した。ここで、「社家日記」によって再興年を確定したい。まず、寛政七年以前に限って、年中行事がいつ再興したか（ここでは、形ばかりの再興は含めない）「社家日記」によって確認できたものの整理すると、次のようになる。元禄五年に名（夏）越祓神事・屠蘇白散神事、元禄七年に鎮祭・御蔭山神事・葵祭、元禄八年に御戸開神事・小早稲神事・冬季神服神事、元禄一〇年に武射神事が再興されている。この外、罷神事と御備神事は確認出来ないが、「賀茂御祖皇太神宮年中神事」に元禄五年再興されている名（夏）越祓神事・屠蘇白散神事と同じく「近年再興」と記されているので、近い時期の再興であると推察出来る。つまり、元禄年間に再興されていることが確認できるものが一一あることになる。寛政七年以前の再興数は一四であるので、

その殆どが元禄五年から一〇年に集中していることになる。従って、下鴨社では、元禄五年から一〇年という時期は、勅祭である賀茂祭だけでなく中断していた多くの年中行事が再興した時期であったといえる。

では、下鴨社は、どのような方法で年中行事再興の働き掛けを行ったのであろうか。下鴨社の中絶した年中行事を再興する契機の一つとなったのは、天和二年の賀茂奏事始の再興と考える。延宝七年に、寛永六年の遷宮から五〇年ぶりに下鴨社の造営遷宮が行われた。その二年後の天和二年に賀茂伝奏始が再興されている。これが、下鴨社において年中行事が再興された始めてであり、これが下鴨社の年中行事再興への動きの契機の一つにもなっている。賀茂奏事始とは、毎年正月、宮中で賀茂伝奏が天皇に対して、下鴨・上賀茂両社の祭事や社殿の状況を報告し、社家の人々の官位叙任を申請する宮廷行事である。おそらく秀吉が関白となる天正一三年頃中断されたと考えられている。^⑤中断から約一〇〇年を経て、翌天和二年正月一二日に賀茂奏事始は再興されている。その奏事目録から、天和二年から元禄八年の、両賀茂社の年中行事に関するものを抜き出してみよう。^⑥下鴨社は、賀茂奏事始が再興した天和二年から賀茂祭再興がなされた翌年の元禄八年まで、「神事無為事」という奏上が続く。一方上賀茂社では、天和二年から貞享三年まで「神事無為事」を奏上している。そして、大嘗会が再興した貞享四年に、初めて「祭再興事」となり、賀茂祭が再興された元禄七年まで同じである。貞享四年から、上賀茂社は賀茂祭再興を願出でているのである。そして、それが成った元禄八年の奏上は、「神事無為事」となっている。これは、上賀茂社が賀茂祭再興を強く働き掛けていたのに対して、下鴨社は、それをしていない。賀茂祭再興に対

して、上賀茂社と下鴨社の対応に、違いがみえる。

これ以外にも、同様の傾向が見られる。上賀茂社の近世の根本史料といふべき「賀茂注進雜記」の「第二 祭礼」に「当皇太神宮第一の葵祭に、勅使官幣の立申さざる事のみ社家中年比の敷にて候へば」とあるが、下鴨社の近世になって最初に作成された「賀茂御祖皇太神宮年中神事」の奥書には賀茂祭について触れられていない。

奏事始の奏上等の賀茂祭再興についての扱いが両社において異なるということは、決して下鴨社が賀茂祭再興に対して消極的であったことを示しているのではないと考える。そのことは、賀茂祭再興に際する、次の記事から窺える。「社家日記」の元禄七年二月四日の記事に次のように記されている。^⑦

年中神事目録清書、河合彌宜祐之書之、久祐・秀久・康忠一社惣代判形、淡路守殿へ□参、目六書又ハ神事之子細委書付、其上今度御葵祭御再興成被下候上ハ、外之神事之義願申間敷由、手形別ニ致し可申由、明後六日、上賀茂□申合可上由被申渡、於会所神事目録書改畢、上古之庄園・御厨所□奥ニ書入之申

つまり、町奉行小出淡路守に、賀茂祭再興の為に、賀茂祭再興の口上書と年中七五度の神事と諸国荘園寄附等の書付を加えた神事帳（「賀茂御祖皇太神宮年中神事」）、それに加えて「外之神事之義願申間敷由」という手形を態々提出するように申し渡されているのである。この度は賀茂祭の再興のみを願う以外の神事の再興願いは言わないという手形を態々付けさせられたのである。この事より、それまでに下鴨社が強く、中断している諸神事の再興を働きかけていたことが窺える。

以上のことから次のような事が言える。近世鴨社において、中絶した年中行事の再興は、近世を通じて行なわれているが、なかでも元禄五年から元禄一〇年に極めて集中的に行なわれていることが解かる。その理由は、神社の側より朝廷と幕府とに行なわれた働きかけによるものであると考える。その意味でも、天和二年の賀茂奏事始の再興は、下鴨社の年中行事再興における一つの契機となったと考える^①。上賀茂社が、賀茂祭再興を奏上して叶えられている事からも、奏上が形ばかりのものでなかったことが解る。また、上賀茂社が、常に賀茂祭再興を働き掛けていたのに対して、下鴨社はそうしていない。同社では、当中断していた多くの年中行事の再興を働きかけていたのである。そこに、当時、下鴨社の年中行事が半数以上中断していたという事実が関係していることが窺える。

おわりに

本稿では、近世下鴨社の年中行事研究の第一歩として、元禄期の再興に焦点をあてて、文明期以降中断した年中行事が、何時どのようなものが再興されたか整理することを試みた。その為に、近世下鴨社の年中行事を記した『年中行事帳』を探し整理することも行った。また、元禄期以前の年中行事の施行状況を知る為に、延宝期の施行状況を確認した。

「賀茂御祖皇太神宮年中神事」によると、近世の下鴨社において把握されている年中行事は七五回を数える。それらの年中行事は、荘園の退転や文明の乱による社殿の焼失によって中断を余儀なくされた。太閤検地で定められた五四一石の朱印地では、中断以前と同様に年中

行事を施行することが出来なかった。下鴨社では、中断した年中行事の再興が近世を通しての願いであったと言える。年中行事施行状況は、元禄七年には無退転二八・形ばかり施行七・退転四〇、寛政七年には無退転三八・形儀七・退転三〇、近世末には、無退転四三・形ばかり施行一三・退転一九であった。多くの年中行事が再興するなか、近世において退転した年中行事が一つもないことは興味深いことである。

数の上から見ると、下鴨社では年中行事の再興は近世を通じて行なわれているようにみえる。しかし、どのような年中行事が再興されたか見てみると、寛政七年以降に再興されたものの多くは、日供御料と類を同じくするものである。それを考慮すると、年中行事の再興は、元禄五年から元禄一〇年に極めて集中的に行なわれていることになる。下鴨社側の、朝廷や幕府への、当中断していた年中行事の再興に対する働きかけが有効に作用した時期であったといえよう。

本稿では、年中行事の再興状況を中心に近世下鴨社の年中行事の概観を述べたにすぎない。今後は、年中行事を再興する為にどの様に働き掛けたかということ、年中行事に必要な経費の確保の仕方、再興された年中行事の下鴨社における位置付け等を追求していく必要がある。また、『下鴨社家日記』を読み進めることによって、備進神供の調達方法や、氏人の年中行事参加の在り方についても明らかにすることが出来るであろう。

註

① 京都女子大学図書館所蔵。日記の目録については、佐藤文子「京都女子大学図書館蔵『下鴨社家日記』(田中家日記)について」(『史窓』五五

号)を参照されたい。

② 近世以外の両賀茂社の年中行事の研究としては次のものがある。

岡田莊司「平安前期神社祭祀の「公祭」化・三橋正「賀茂・石清水・平野臨時祭について」(共に「平安時代の神社と祭祀」所収)、岡田莊司「臨時祭と大神宝使」(「平安時代の国家と祭祀」所収)、高木博志「明治維新と賀茂祭・石清水放水会―「朝廷の祭」から「神社の祭」へ―」(「近代日本社会と天皇性」所収)。

また、近世年中行事の上賀茂社側に立った研究としては次のものがある。

所功「賀茂注進雜記」に関する覚書」(『京都産業大学日本文化研究所紀要』創刊号)・同氏「賀茂奏事始」の覚書」(『京都産業大学日本文化研究所紀要』第二号)・同氏「賀茂臨時祭の成立と変転」(『京都産業大学日本文化研究所紀要』第三号)。

③ 『日本祭礼行事集成第一巻』所収。

④ 年中行事帳」という史料名はないが、本稿では便宜上、年中行事に關して書かれたものを総称する。

⑤ 鴨脚家は、祝として下鴨社に出仕した家である。本稿では、「鴨脚家文書」(京都市歴史資料館架蔵写真版所収、以下「鴨脚家文書」と称す)・「鴨脚正彦家文書」(京都市歴史資料館架蔵写真版所収、以下「鴨脚正彦家文書」と称す)・「鴨脚家文書」(京都府総合資料館所蔵、以下「総合資料館所蔵鴨脚家文書」と称す)を使用した。

⑥ 京都大学文学部附属図書館所蔵。

⑦ 『親長卿記』。

⑧ 『親長卿記』。

⑨ 朱印高の配分であるが、「鴨脚光行日記(元禄一六年)」の四月九日の記事に次のように見られる。

「下賀茂神領高五百四拾壹石

配分之目録

一、五拾六石式斗八升七合

一、三石六斗六升四合

一、六石式斗七升五合

造管料

神供料

下行方

(以下、社司方・氏人方と続くが、省略する。)

また、賀茂祭・臨時祭再興以降のことであるが、この朱印高以外に、明治期に記された「賀茂神社祖神社并攝社末社祭神勸請年記宦私祭日造管年記建物坪等注進書」(下鴨社所蔵)によると、次のようなものがあった。

「高 五百四拾壹石

但朱印地

同 拾壹石式斗

但朱印高外神馬料

現米四百七拾八石式斗

賀茂祭御祭典料

同 貳百拾壹石七斗五升

臨時祭御祭典料

⑩ 「春光日次(延宝六年)」(「鴨脚正彦家文書」)。史料中には、「神供備ル」とのみ出てくるものが多いので、施行日から年中行事名を推定した。

また、日供御料は「神供備ル」と出てくるが、もともとそういう祭祀であるので中断以前と同様とした。本文中に挙げたもの以外には、「神供備ル」と「月次之巻数」という記事が見られるのみである。

延宝六年の「田中伊連日記」の中には、年中行事の記述がみられない。

これは、田中家が年中行事に係わっていなかったためではない。実際、同年の「春光日次」には、田中家が年中行事に係わっていることを示す記述が多く出てくる。

⑪ 小山利彦「文献資料―賀茂御祖神社関係新資料―」(『王朝文学世界の研究』所収)で、翻刻されている。

⑫ 「祐直卿年中神事次第并神殿舎屋之記」(「総合資料館蔵鴨脚家文書」)。祐直とは、従三位であるにもかかわらず「公卿補任」にも記されていない。

⑬ 『官国弊社特殊神事調』(神祇院 国書刊行会昭和四十七年九月二五日発行)に次のように記されている。

「夏越神事(矢取神事とも称す)八月立秋の前夜 井上社祭

由来 此神事は御手洗川の水源をなす井の上に鎮座まします末社井上社(御手洗社とも称す)の前に於て執行せられる。井上社と申すは祇戸神瀬織津姫命を奉祀し、文禄年中の建立に係る。神事の起源については詳ならざるも、元禄五年衰頽せるた復興して明治維新に至り、其の後、形様を存するのみとなりたるを、大正五年再興して現在に及べるなり。」

⑭ 『光行日記（元禄五年）』（「鴨脚正彦家文書」）。

⑮ 前出「元禄五年光行日記」。

⑯ 「秀久日記（元禄七年）」（「鴨脚家文書」）。

⑰ この「上座争論」は、「鴨脚家文書」「鴨脚正彦家文書」に度々見える。禰宜家が社務職に付くことを祝家が拒み、従来通り年老位次を以て上首を決める事にされている。この上座争論は度々起きており古くは親長日記にも見ることが出来る。その為か氏人も祝方・禰宜方の別があったようである。元禄五年には祝方氏人として御矢川大膳・下田筑後・下田右衛門・田中掃部・下田右京・御矢川主税・河崎織部、禰宜方氏人として南大路宮内少・菊下野守・下田木工・林主殿・林右近・南大路玄蕃・林助之丞・南大路左京・下田伊左衛門・山口市之丞の名前が挙がっている。（他の年度との変動はなく、定まったものであったようである。）

⑱ 「総合資料館所蔵鴨脚家文書」の中にも、¹⁸年中行事帳は数多く見られる。しかし、それらは記された時期や作成者の解らないものが殆どである。

⑲ 異本としては、神宮文庫所蔵のものがある。この「賀茂御祖皇太神宮年中神事」作成の経緯は、「秀久日記（元禄七年）」・「日次目録」（「鴨脚家文書」）・「光行日記（元禄六年十一月一日〇日〜元禄七年正月）」（「鴨脚正彦家文書」）のなかに詳しく記されている。

「賀茂御祖皇太神宮年中神事」の（奥書）

「右年中神事七拾五度御座候中古迄者諸国之庄園并御厨所等御寄附御座候而年中諸神事日供等迄厳重ニ御座候処ニ唯今者 御朱印五百四拾壹石之外諸国之庄園者断絶仕候故大祭之儀者神領少地ニ御座候而難勤中絶仕候凡三拾五ヶ度之神事者形斗当時無懈怠令執行天下安全
公武之御祈禱相勤申候今後依 仰神事目録粗書付差上申候以上
元禄七年戊二月六日

下鴨惣代

同

同

同

御奉行様

同

同

⑳ 異本としては、京都大学所蔵・大東急記念文庫所蔵・穂久邇文庫所蔵・旧彰考館文庫所蔵のものがある。

㉑ 異本としては、下鴨社所蔵（禰宜広庭祐尚によって作成）がある。

㉒ 「御祖宮年中行事」の（奥書）

「右当宮年中行事者当時所執行之也応或人之需記之

御祖宮権祝

寛政七乙卯年季冬

從三位鴨秀豊

㉓ 異本としては、「年中神事執要略次第」（「官幣十二社官祭私祭取調書」京都府立総合資料館所蔵）がある。

㉔ 「年中神事目録」の（奥書）

「右年中神事七拾五度御座候中古迄者諸国之庄園并御厨所等御座候間年中諸神事日供等迄厳重ニ御座候処唯今者高五百四拾壹石之外諸国之庄園者断絶仕候故大祭之儀者神領少地ニ御座候故難勤中絶仕候凡三拾五ヶ度之神事者形斗当時無懈怠令執行天下安全之御祈禱相勤申候今度依 仰神事目録粗書付差上申候以上
明治二年己巳七月

神祇御官

鴨社

㉕ 無退転と形ばかり施行の別を土解神事を例にとって説明する。

「賀茂御祖皇太神宮年中行事」に次のように記されている。

二月三十日 土解祭献御饌儀土毛之儀社司二人氏人二人参于宮頭献朝夕

御饌於本宮及撰社末社其儀如恒例也

当時中絶之祭事

二月晦日 土解又土毛此於舞殿正官着座忌子同着座而稻種在御占之

儀此占者陰陽寮勸進申又献御饌者勸盃之儀也

㉖ 「賀茂御祖皇太神宮年中神事」には、

「以上年中神事七拾五度

内

三拾五度之神事者形斗にて相勤申候

四拾度之神事者当時退伝申候

と記されているが、年中行事ごとに記載されている内容には「無退伝」

「近年再興」と見えるものがある。本稿では、年中行事ごとに記載されて

いる内容の記述に従った。

奥書に「形斗相勤候」「退伝申候神事ハ退伝申候」の分類しかしていな

い理由は、元禄七年二月三日の神事帳作成の記事の中に（「秀久日次（元禄七年）」（『鴨脚家文書』）

「小出淡路守様へ早々御用之儀御座候間、役者三人御出可被成与申越候故、久祐・秀久・康忠参候処ニ、下鴨年中神事今迄相勤申候分ハ形斗相勤申候、退伝申候神事ハ退伝申候与、神事之様子共国明ニ御書付可被成候様ニ被申付候、」

とみえることから、町奉行小出淡路守守里の指示に従った為であろう。

② 「年中神事目録」には、

「以上年中神事

七拾五度

内二十五度ハ

元禄以後無退伝相勤申候

三十度度ハ

当时形斗相勤申候

十九度ハ

退伝申候」

とあるが、本稿では、年中行事ごとに記載されている内容に従った。

③ 所功「『賀茂注進雑記』に関する覚書」（『京都産業大学日本文化研究所紀要』創刊号）、並木昌史「延宝七年石清水放生会の再興」（『国学院雑誌』九六巻七号）、武部敏夫「貞享度大賞会の再興について」（『書陵部紀要』第四号）、大屋敷佳子「幕藩制国家における武家伝奏の機能」（『論集きんせい』第八号）、久保貴子「天和・貞享期の朝廷と幕府—靈元天皇をめぐる—」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』別冊第一四集）、高埜利彦「江戸幕府と神社」（『近世日本の国家権力と宗教』所収）。

④ 前節では賀茂奏事始が「賀茂御祖皇太神宮年中神事」の七五度の年中行事に入っていないため触れなかった。

賀茂奏事始の再考の経緯や史料については、所功氏前掲論文「『賀茂奏事始』の覚書」に詳しい。

⑤ 「奏事始」（『総合資料館蔵鴨脚家文書』）。

⑥ 『続々群書類従』所収。上賀茂社では、延宝九年には、七二の神事が存在し、その内七の神事が中断している。従って、六五の神事が行なわれていたことが解る。退転している神事が少ないことが、下鴨社と働きかけの異なる要因の一つと考えられる。

⑦ 「光行日次（元禄六年十一月一〇日〜元禄七年正月）」（『鴨脚正彦家文書』）。

⑧ これ以外に、幕府への働きかけが大きな要因であったと思われる。費用確保の問題と併せて、今後の課題としたい。

〔付記〕 本稿を作成するにあたり、下鴨神社嵯峨井建権禰宜に御高配賜りました。記して篤くお礼申し上げます。

また、再三の史料閲覧をお許し下さいました京都市歴史資料館に、末尾ながら心よりお礼申し上げます。